

「イスラエル建国史」

11 東アフリカ入植計画 の背景

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

◆先月号の内容◆ イスラエル建国の父、ヘルツェルは、ユダヤ人国家建設を目指し、イギリス、ドイツ、トルコ、ロシアなどを相手に積極的な外交活動を展開した。しかし、目に見える成果はなく、外交活動に終始して実践活動に力を入れていないとしてシオニスト kongress 内部でヘルツェルを批判する者が出てきた。そうした中、イギリスはイスラエルの地以外の地に入植する可能性をヘルツェルに打診してきた。

ポグロムの再発



キシニョフ

1903年4月、再びポグロムが発生した。ちょうど過越祭の時に、今度はキシニョフのユダヤ人社会が襲われた。暴徒は、ユダヤ人の住居、店舗1500軒を略奪し、住民47人を殺した。重傷者92人を含め数百人が負傷したが、死体の多くは切り刻まれ、重傷者も手足を切断されるなど、残虐な扱いを受けた。同じ年の9月、ポグロムは白ロシアのホメルに飛び火した。ここは、1648年のポグロムで、約2000人のユダヤ人がコサックに虐殺された暗い過去を持つ。

ヘブライ詩人ハイム・ナフマン・ビアリク(1873～1934年)は、ポーランドのソスノビエツで教師をしていたが、1900年にオデッサへ移り詩作に励んでいた。そこで起きたのがポグ



ビアリク

ロムである。ユダヤ人社会から依頼されて視察に行った。このキシニョフの惨劇を長編詩に綴ったのが悲歌『虐殺の町にて』(Be-Irha-Haregah)である。虫けらのようにむざむざと殺されていく人々。ピアリクの詩を読んだ多くのユダヤ人青年が憤激し、自衛意識に目覚めていった。無抵抗のままでは駄目だ、とそ

の詩は訴えていたからである。ユダヤ人青年が自衛組織を作るようになったのは、この事件がきっかけである。

1903年に始まったポグロムは、1906年になってビヤウストク(6月、80人死亡)そしてシエドルツェ(8月、30人死亡)の襲撃事件をもって一応終息した。この間都市部の社会64か所、小さな町(シュテートル)や村は626か所がポグロムの被害にあった。

特に1905年が一番ひどく、キシニョフが再び襲撃され、オデッサでは300人を超える人が殺され、数千人が負傷した。ロシア、ウクライナ、そしてベッサラビアのユダヤ人社会は動揺し、大量流出が始まった。

第6回シオニスト kongress

1903年8月23日、このような社会状況のもとで、第6回シオニスト kongress が、スイスのバーゼルで開催された。冒頭ヘルツェルは、シナイ入植計画の経過について触れ、うまくいかなかった理由を説明した。その後、東アフリカ入植(通称ウガンダ計画)に関するイギリスの提案を披露した。会場は万雷の拍手に包まれたが、一時の興奮がさめると、ロシアの代表の間から猛烈な反対の声が上がり始めた。

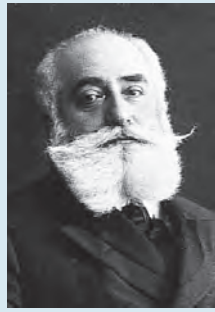
英政府アフリカ保護領担当のサー・クレメンツ・ヒル局長は、東アフリカにユダヤ人入植地用として適当な場所があるかどうか、調査団を送って調べたらどうか、と提案していた。ヘルツェルから見ると、場所はともかく、この提案は重要な意味を有していた。世界の大国がユダヤ人を、独自の居住地を必要とする民族と認めたからである。

ヘルツェルが調査団の派遣を提案すると、ロシアから来た人々は、バーゼル綱領からの逸脱であるとして、調査そのものにも反対した。ロシアではポグロムが発生し、緊急避難の場所



キシニョフのポグロム生存者

を確保するのが急務と思われたが、彼らは場所確保第一主義ではなかったのである。その点では副会長のマックス・ノルダウも同感であった。ヒルシュのユダヤ人入植協会が進めているアルゼンチン入植事業は、順調に進んでい



マックス・ノルダウ

ない、それは、心をゆさぶる精神性に欠けるからである、とノルダウは考えていた。しかし、現在はあらゆる可能性を探る段階であり、エрецイスラエルへ至る過程のナハトアシール（夜露をしのぐ仮の宿）としてヘルツェルを支持した。

ヘルツェルにしてみれば、自分の政治・外交活動がすべて否定されるようで、心外であった。トルコ政府に対して、シオニズム支持の政治宣言と引きかえに、借款の提案をしたものの、誰も金集めに協力してくれない。イギリスから折角受けた提案も、検討すらしないとすると、今までの努力が全く無駄であるように思われる。ヘルツェルは、自分はシオニズムの基本に忠誠であると説明し、「エルサレムよ、もしもわたしがあなたを忘れるなら、わたしの右手はなえるがよい」と詩篇137を引用して締めくくった。

調査団派遣の是非について投票が行われ、賛成295、反対179、棄権98で、派遣が決まった。しかし、反対派は投票による採決でも釈然とせず、別室にこもって抵抗した。

英政府の提案した場所は、ウガンダではなく、ケニアのウァシン・ギッシュ平原。後年ホワイト・ハイランズと呼ばれる1.3万平方キロの地域であった（調査団は、ロシア出身の技術者ナフム・ウィルブッシュを初め3名でチームを組み、1905年初め現地を訪れた）。

入植反対派の活動

東アフリカ入植の反対派（ナインザーガー）は、ツィオネイ・ツィオン（シオンのシオンびと）という名で知られるようになる。その急先鋒がホベベ・

ツィオンの流れをくむオデッサ委員会幹部（1906年に委員長就任）のメナヘム・メンデル・ウシシュキン（1863～1941年）であった。行動の人ウシシュキンは、1903年のポグロム直後キシニョフを訪れ、犠牲になった家族の孤児を、エрецイスラエルの

キリヤト・セフェル農業学校で引きとる手筈を整えた。8月には現地へ赴き、二つの組織化を行った。一つは開拓村を中心としたユダヤ人社会の統合で、ジフロン・ヤーコブに代表を召集し、中央機関の設立を決議した。第二がヘブライ教師協会の設立である。前者は順調にいかなかったが、後者は大いに発展した。

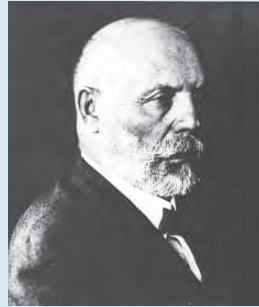
大荒れに荒れた第6回シオニスト kongress 後の10月、ウシシュキンらを中心になってハルコフで会議を開いた。世界シオニスト機構に加盟しているロシア支部から大半のメンバーが参加し、ウガンダ計画の正式放棄とヘルツェルの権限縮小を盛りこんだ決議を採択した。会議は代表団を送って、この最後通牒をつきつけようとしたが、ヘルツェルは面会を拒否した。

ヘルツェルの死

しかし、このままではシオニスト運動は完全に分裂する。そこでヘルツェルは1904年4月に kongress の拡大行動委員会をウィーンに召集した。会議はここでも大荒れに荒れたが、血を吐くようなヘルツェルの熱弁で、参加者は分派行動を取らないと約束した。

その頃は、体力の限界にきていた。東奔西走し、心労が重なって持病の心臓病が悪化していたのである。私財を投げうって運動に奔走したため、家計は火の車。それに病身の妻ユリヤを抱えて、家庭生活も大変であった（ヘルツェルには3人の子どもがいた。長女と長男は不慮の死を遂げ、次女

のトルーデは第2次世界大戦時テレージエンシュタット強制収容所に移送されて殺された）。医者者の勧告でチェコのフランツェンスバードへ療養に行ったが、一時ウィーンへ戻っている。しかし病状が急速に悪化し、ウィーンのエドラッハという療養地に運ばれた。そしてそこで肺炎になり、1904年7月3日に死亡した。享年44歳。ヘルツェル死去のニュースは、欧米のユダヤ人社会に衝撃波となってかけめぐった。当時、世界シオニスト機構に加盟したグループは1572組織に達していたが、葬儀には各地からたくさんの方がかけつけて参列した。



ウシシュキン

ヘルツェルの死去と前後して、ウシシュキンは「我が計画」と題するパンフレットを出版した。それは運動の目標を次の三つに設定していた。

- (1) 国際社会によるシオニズム運動の認知
- (2) 土地の購入、開拓の推進
- (3) ヘブライ文化、教育の振興

これは、統合シオニズム（Synthetic Zionism）の先駆ともいうべき運動方針であり、やがてこれが第10回シオニスト kongress（1911年）で正式の運動方針として採択される。しかし、その一方で、ウガンダ案に触発され、父祖の地エрецイスラエルにこだわらない人々が別の動きを始めていた。

